安原貞室著『かたこと』の副詞語彙の解説と考察

岡野信子

徳川初期の俳人安原貞室の『かたこと』について、本学の白木教授は、「*みずからの信ずる規範意識を基に、かたこと批正の信念と論述を展開している」と述べていられる。

＊白木進教授編著「かたこと」一八七頁（笠間選書53）

著者が「かたこと」と指摘するところは多くは訛音であるが、そのほか、用語や用法の是非・使用場面の適否をも論じている。その筆はかたこと批正を離れてときに語源を説き、また語の意味を解説することもある。そこにとりあげる諸語は体言・用言にとどまらず、副詞・接続詞なども多い。著者の言語感覚の鋭く豊かなためであろう。

私は貞室が『かたこと』において、副詞語彙の解説と考察を試みていることに注目している。貞室のとりあげた副詞はおよそ*一九五語であるが、そのほとんどは当時の口頭語の副詞である。文章語の副詞は、「しとゝに」「ほうど」など、ごくわずかなものがあるにすぎない。

＊「ひとつ」を名詞とするか副詞とするかなど、副詞認定の幅は人によっていくらか異なる。私はこの類のものを副詞と認める立場をとっている。

取りあげた副詞への貞室の視点は次の三点である。

1　意義の説明
2　語源・出自の追求
3　発音・用語・用法などの是非の論

1にあげた「意義の説明」は、擬音・擬態の副詞に対してなされたものである。辞書風に語義の説明を試みたことは、「かたこと直し」の本旨からそれているとはいえ、俳人の手になる言語の書の面目は、むしろここに躍如としている。擬音・擬態の副詞は、俳言として重要なものであったに違いないから。俳言として重要なばかりでなく、日常会話の中でも、擬音・擬態の副詞は多用されていたに違いない。新しい時代の新しい語の面目は、擬音・擬態の副詞に特に顕著で、貞室の言語意識を刺戟したかと思える。小稿では、『かたこと』における副詞語彙の解説と考察のあとをみていきたい。またそこにとりあげられた副詞語彙そのものについても考えてみたい。

『かたこと』は、白木教授の頭注によって、また教授が各条に番号をつけられたことによって、読解・検索がずいぶん容易になった。教授の古稀の賀を心からお祝い申上げ、日ごろの学恩を謝しつつ、

考究に励みたい。

1　擬音・擬態の副詞の意義を説明したもの

擬音・擬態の副詞の意義を説明した条々は巻五の「雑詞の部」の683条から740条までであるが、そのほか巻二・巻三にもいくらか見えている。また743条もそれである。さきにも述べたように、擬音・擬態の副詞は重要な俳言であったと察せられるが、貞室以外の俳人の書に、このように擬音・擬態の副詞を説明したものは、まず見当らないのではあるまいか。『かたこと』の出版を刺戟したかと思える松江重頼の『毛吹草』にも見えない。また『かたこと』にならって出された『浮世鏡』や『かたこと百廿ケ条』にも、擬音・擬態の副詞はとりあげられていない。貞室が『かたこと』で擬音・擬態副詞の意義の説明を試みていることは、注目に値することであろう。

著者は740条で「かんごり」を説明した後に、「右五六十のこと葉は大かた音響をもて。頓而唱（やがてとな）ふる歟。」と述べている。そしてここに集められている語群のそれぞれの説明文は、その多くが「……音歟」「……白歟（かたら）」「……かた歟」「……さま歟」「……心歟」と結ばれている。中に「……声歟」の一例もある。「音」「声」という説明は、今日の擬音語・擬声語に相当する。「白」「かた」と「さま」とは、それらの語を厳密に踏まえれば、形態象徴と状態象徴であろう。ただしこのように説明し分けられた語群の間に、明確な差異は認めにくい。また「心」という説明語は、金田一春彦氏の言われる擬情語に近いが、「……心」と説明された語と、「……白」と説明された語とは、さしたる違いを持っていない。

このように「白」「さま」「心」などの説明用語は、必ずしも厳密的確ではないが、貞室が、擬音・擬態の副詞の意義の説明に苦心していることは、十二分に窺える。意義を説明した文の末尾の「歟」は、『かたこと』においては疑問表現の辞ではなくて、婉曲断定表現の辞である。

貞室はとりあげた擬音・擬態の副詞を配列するのに、たとえば語頭音の近いものを寄せるとか、あるいは意義の近いものを寄せるなどの配慮をいくらか見せてもいる。が、思いつくままにとりあげたらしい面も、多分に見られる。いくらかの分類・整理を試みながら、貞室のとりあげた擬音・擬態の副詞とその説明文とを、以下に列挙しよう。『かたこと』の本文は、白木教授編著『かたこと』のそれを写し、また『近代語研究』（近代語学会編）第三集の写真版をも参照した。「……」は、本文省略の部分である。ルビは略したものもある。

(1)「……音」「……声」と説明された擬音副詞

697 一かた〳〵は　。かたき物の厦（しばゝ）なる音歟

696 一がた〳〵は　。歯などのあはずしてふるう音歟。薬など細末してふるう音歟

722 一こと〳〵は　。戸などの鳴音歟

723 一ごと〳〵は　。箱などの中のくつろぎて入たる物のなる音歟

687 一しと〳〵とは　。春雨などのしづかなる音歟。それをじと〳〵といふは如何。じと〳〵とは薫物に蜜やあまづらなとの過たるをいふか。（以下略）

726 一じや〳〵　。痰などの咽につまりたる音歟
739 一ひちよ〳〵は　。小鳥の飛啼の声歟
738 一びちよ〳〵は　。小水に魚などの動く音をいふ也
667 一（略）べら〳〵。へら〳〵。めら〳〵は皆等しかるべし。火などの付て焼侍る音なるべし。安部のむらじがかくや姫にをくりし火鼠のかはの。めらめらと焼たるといふことを。竹取の物語に書り
735 一かつさりは　。爪にて物をかくをと歟
736 一がつさりは　。障子など俄にあらくあくる音歟
734 一かつしりは　。かたき音歟。又岩の上を駒のゆく足音歟
695 一がつたりは　。もろくたふれたる白歟。又物にあたりてかたきをと歟
733 一がんじりは　。かたき物嚙あてたる音歟馬のくつはをかむ音歟
724 一くはつたりは　。重き物の落る音歟
725 一ぐはつたりは　。ひびきて落る音歟
701 一くつさりは　。少かたき物をつく音歟
702 一ぐつさりは　。和らかなる物を突音歟
737 一くんじりは　。くじけたる音歟
693 一こつとりは　。かたき物の少なる音歟
694 一ごつとりは　右に同じ枢などのおるる音歟。むかしの狂歌の探題をとりて寄し枢恋といふことを当座に老師のよめる
きぬ〳〵の別れよりうしよせじとて
おろすくるゝのごつとりの声
665 一しやつぱりといふべきを。じつぱり。しいわりなどいふは如何。但木の枝などのたはむ音をしつぱりと云。とき洗ひぎぬや。板引のきぬなどのさはさはとなるやうなるを。しやつぱりといふにや
729 一ずつしりは　。いかにもおもき物の落る音歟
731 一ひつしやりは　。神鳴なとの落たるやうの音をいふ歟
51 一……又ひつたりといふは。引板ひく音成べし。
715 一ほつしりは　。的などに矢の当りたる音歟
690 一ぼつたりは　。おもくやはらかなる物の落たる音歟
662 一……ふつと。ふつつとなどいふは。緒や紐などのきれ侍る音を。やがて言葉に用ひそめたること歟

以上の三十五語が、「……音歟」「……声歟」と説明されている擬音副詞である。ただしこの中の「しと〳〵」（春雨の静かな音）「べらべら・へらへら・めらめら（火に焼ける音）」「くんじり（くじけた音）」などは、その状態の象徴音、すなわち擬態副詞とも思える。擬音副詞は模写音、擬態副詞は象徴音と、本来異質のものであろうが、実際には両者の区別の困難なものがある。

ここにあがっている語を、私自身の日常使用語と比較してみると、[*1]まったく同形同意のものは、「かた〳〵」「がた〳〵」「こと〳〵」「ごと〳〵」「しと〳〵」「めら〳〵」「ずつしり」ぐらいで、意外に少ない。また語頭音だけは同じで語形式の異なるものは、「がっさり（ガサット）」[*2]「がったり（ガタント）」「がんじり（ガジット）」「ぐっさり（グサット）」「こつとり（コトント）」「ごつとり（ゴトント）」である。「じやじや（ゼーゼー）」「びちよ〳〵

（ピチピチ）」「かっさり（ガシガシ）」「ふつつと（プツット）」はかなり違っている。その他の語にはそれに相当する擬音副詞が私にはない。擬音副詞も生命の長い語、短い語とさま〳〵なようである。

＊1　現代の京都人の擬音副詞と比較するのがよいのであるが、適当な人が得られず、ひとまず私自身の語と比較した。

＊2　括弧内にかたかなで記したのが、私自身の用語である。

一方、これらの擬音副詞を他の書の中のそれとも比較してみた。＊「ひちよひちよ」「くはつたり」「ひつしやり」は、『かたこと』にしか見られない。「かつさり」「がんじり」「くんじり」は『日本国語大辞典』に見えているが、出典としてあがっているのは『かたこと』だけである。「じや〳〵」「びちよ〳〵」「へら〳〵」「べら〳〵」「ひったり」「ほつしり」は、同語形のものが他書にもあるが、語の意味は異なっている。

＊『日葡辞書』（今泉忠義氏『日葡辞書の研究』による）・天沼寧氏編『擬音語・擬態語辞典』・竹内美智子氏ほか二氏『現行辞書における副詞一覧』（品詞別日本文法講座）・『日本国語大辞典』（小学館）

ところで、695条の「がったり」と725条の「ぐはつたり」とは、この表記のとおりに発音の異なる別語であったのだろうか。『日本国語大辞典』の「がったり」の項には、〈古くは「ぐわったり」とも表記〉とあって、ここに「ぐわったり」「ぐはったり」の用例もあげてある。『かたこと』の695条と725条との説明がいくらか異なっているのは、同一語の意味領域の広がりを見せているのかもしれない。ともあれ、擬音擬声の副詞を説明した貞室の筆は、簡潔で的確である。たとえば723条に「ごと〳〵」を説明して「箱などの中のくつろぎて入たる物のなる音歟」と言い、729条に「ずつしり」を「いかにもおもき物の落る音歟」と言う。筆者の見た現代の二種の国語辞書は、「ぼつたり」を説明するのに、『かたこと』の「おもくやはらかなる物の落たる音」をそのまま踏襲していた。貞室の意義の解説の優れていたことを証明する一例であろう。

(2)「……貞」「……かた」などと説明された擬態副詞

擬態副詞とみられるものは、「……貞歟」「……かたち歟」「……かた歟」と説明されている。また「……さま歟」「……こと歟」と説明されたもの、あるいは「……をいふべき歟」「……をいふにや」と説かれたものもいくらかある。

さきの擬音副詞のばあいは、物音を模したものが多かった。擬態副詞では、人の容姿・表情・状態の擬態副詞が、ものの状態の擬態副詞よりはずっと多くとりあげられている。

①人の容姿・表情・状態の擬態副詞

687……。又しく〳〵とは。声をたてずして泣こと歟それをしくほくとはいかゝ

660……。又人の小足に歩み侍ることを。ちよこ〳〵といふも。あり（マヽ）き侍るるかたち。にや。しほらしきこと葉成べし

717一つく〳〵は　。物あんじながめたる貞歟

703一つべかし。つべ〳〵。つべかはゝ。よく物いふことに云ならはせり

727一どや〳〵は　。人こぞりてうでく貞歟

728一どしやくしや　。とやくも。さはがしきかた歟。いやしきこ

と葉にや

707 一しつかりは　。毒虫などにさされていたむかた歟。又湯などのあつきことに云

718 一つゝくり　。さびしう独立たるさま歟

730 一でつくり　。どつしりなども重きかた歟

699 一につこりは　。笑ふ白歟

700 一わんぐりも　。右に同しくえむ白歟

685 一びつたりは　ぬれたるかた歟。強うぬれたるやうのかたち成べし

710 一ほつこりは　。あたたまるかた歟是もほは火成べし

714 一ほつちり　。ほつちは。寝入たる目を覚して開く白歟

719 一ぼつとり　。やはらかにいとおしきかたち歟

686 一しとゝにぬるるとは帷などの身につく程ぬるゝをいふべきかと一条禅閤の宣り

713 一ほつとは　。息吹白歟　灯けつさま歟

以上の中で「しつかり」は、人の状態にも物の状態にも言うと、説明されている。また「重きかた」と説明された「どつしり」も、人にも物にも言ったのであろう。ここにとりあげられている語は二十二語で、さして多くないが、人の容姿・表情・所作・状態の諸方面に、かなり多角的に擬態副詞をあげている。これらの彙集には、どのような方法を用いたのであろうか。

ここにあがっている語のうち、「しく〳〵」「ちよこ〳〵」「どや〳〵」「どつしり」「につこり」「しとど」は、今日もこのまゝの形である。また「つべ〳〵（ツベコベ）」「どしやくしや（ドサクサ）」「びつたり（ビッショリ）」「ほつちり（パチット）」「ほつと（フット）」は、今日のものは語形式が少し変化している。「やはらかにいとほしきかたち」と評された「ぼつとり」は、今日言ふ「ポチャポチャ」であろうか。

人に関する擬態副詞の説明は、「しほらしきことば」「いとほしきかたち」「いやしきことば」のように、評価の語を伴いがちである。語に対する批判と、その語によって表現されている容姿・状態そのものへの批評とが交錯しているようである。

②物の動き・状態の擬態副詞

667 ……ひら〳〵とは。縦へばうすき物のちりて光るかたちにや。びらびらとは是も薄などのちれるさまにや。ひらり〳〵といふもおなじかるべし。

692 一ほた〳〵は　。大なる花のりんなどの落たる白歟

695 一がつたりは　。もろくたふれたる白歟。又物にあたりてかたきをと歟

740 一かんぐりは　。かごやかにおくまりたるかた歟

706 一ぐつちやりは　。いやしき詞にや。しどけなきかたにいふ

698 一しつこりは　。かたくおもきかた歟

659 一物のつゞまやかなることを　。つんまりとは如何

732 一びつしやりは　。物のつぶれたるかた歟

743 一ぶらりといふこと葉は。高き所より落もはてずして。半にあるやうの白歟。不落離と書よし云り

684 一ひつたりといふは。うすくひくき物の。水などにひたりて。物につきたるをいふにや

688 一へつたりは　。ひらひら座する貞何にてもひらめなる物をすへたるをいふ歟

711 一ぼつこりは　。やはらかなる貞歟

691 一ほつたりは　。さのみおもからぬ物の落たるかたにや

683 一ほうどなどいふこと葉。物の砕けつ。おれつなどする時にのみいふべきにや。掊と書てほうどくだくるとよむとかや

ここにあがっている十六語の説明の中では、「ほた〳〵」の説明がことに美しい。「大なる花のりんなどの落たる貞歟」というその説明は、二・三の現行国語辞書の説明と比較しても、貞室の説明が最も簡潔で美しい。また「ひら〳〵」を「縦えばうすき物のちりて光るかたちにや」と説いている。これも一見無造作であって、みごとに言い得ている。

683条に「ほうど」と表記されている語は、今日の「ポント」に相当する語である。貞室のころには、どのように発音されていたのであろうか。

(3)「……心」と説明された擬態副詞

708 一しか〳〵は　。同じく虫のさしていたむ心歟。又熱湯(あつゆ)にてかゆがりをたづるやうのこと歟*

*「同じく」は707条の「一しつかりは　。毒虫などにさゝれていたむかた歟」をさして言う。

709 一しかほかは　。同じく毒虫などのさして跡のほとほる心歟。ほとほるのほは。火也

661 一物をきり侍るを……。すかときるは。すか〳〵ときるといふこころにや。すか〳〵速の文字歟。はやくきる心成べし。

704 一ぞんべり　ぞべ〳〵は。物のっややかなるこころ歟

716 一ほし〳〵は　。夜をいねずしてさびしう明したる心歟。

720 一ぼじや〳〵も。なよなよも右に同じ心歟*

*「719 一ぼつとり　。やはらかにいとおしきかたち歟」をさす。

712 一ほや〳〵は　。いかにもやは〳〵の心歟

705 一もシ〳〵は　。こまやかにうつくしき心歟

689 一べつたりは。前に同じ心にて。少もたれたる心にいふにや。*

*「688 一へつたりは　。ひら〳〵座する貞」をさす。

「ほし〳〵」は浮世草子などにも用いられているが、これにぴったりあたる現代語は何であろうか。「ぼじや〳〵」は今日の「ポチャポチャ」にあたるらしいが、私の音感覚では、両語のひびきは相応じない。

「……心歟」と説明されているのは、以上の十二語である。この中には、「ほし〳〵」「ほや〳〵」「もシもシ」のように、擬情副詞の名の妥当な語もある。ただし一方には、「すか〳〵」や「ぞべ〳〵」のように、物について言う擬態副詞も「……心歟」と説明されている。「心」は「音」や「貞」と並ぶことばととるよりも、広く「意味」といった程度に理解するほうがよさそうである。「心」と説明された十二語を加えると、擬態副詞は五十語である。これらの中で、「しか〳〵」「しかほか」「つんまり」「ぽつとり」「ぽつとり」「わんごり」は、『大日本国語辞典』に見えているが、出典としては『かたこと』があがっているばかりである。また「ぼし〳〵」は『日葡辞書』の「ホシホシト」とは、まったく意味が異っている。別語であろう。

『かたこと』にとりあげられている擬音・擬態の副詞は、以上の八十五語である。

擬音・擬態の副詞の意義・意味を説く貞室の文章が、簡潔明晰で美しいことは、くりかえし述べた。ただひとつ惜しまれることは、これらに文例・句例の添えられていないことである。語は本来、文の中に生きるものであるから、未知の語の意義・意味を、解説だけでほんとうに知ることはむずかしい。修飾語である副詞のばあい、特にその感が強い。文例・句例が添えられてあったら、この書は擬音・擬態副詞の解説書としても、いっそう優れたものとなったであろう。

2　副詞の語源・出自を求めたもの

言語への関心の強かった貞室は、語源や語の出自について語ることも多い。副詞について語源・語の出自を求めたものは次のとおりで、括弧内の語が彼がその副詞の語源・出自と認める語である。

44だくぼく・だくりぼくり（啄木）　164きっぱり（潔白）　36けんざり（顕ざり）　710ほつこり（ほは火成べし）　721くつと（軌と）　92ひしと・ひつしと（靡恃と）　198ふつと（不図・不斗・与風）　683ほうど（掊ど）　682まうに（猛・蒙・間・舞か）　57じやうに（上か・畳か）　91一しき（一式）　743ぶらり（不落離）

656ぬまり・ぬんまり（沼り）　663やつぱり・やはり・やつぱし（矢張り）　741えて（得手）

これらの語源説に無理なものが多いことは、一見してわかる。ここに最も強く見られる傾向は、漢語への傾斜である。実は貞室は『かたこと』の中で、漢語の濫用をきびしくいましめている。その貞室も語源考察ともなると、このよりに、漢字・漢語を当ててみるのである。たとえば36条で、「あざやかなるをあんざりなどゝいふ」とみずから述べながら、「けんざり」には「顕」をあててしまう。「あざやか」→「あんざり」ならば、「けざやか」→「けんざり」であると、そのままに認めることをしない。この時代のインテリの宿命であろう。

「235めつた」「234まんざら」「120本より」の三語については、「出所しらず」「出所しらまほし」と、語源追求の志を述べるにとどまる。ただし「まんざら」については753条では「満更」を当てて、湯桶ことばとして批判している。

副詞にかぎらず、語源を明らかにすることはむずかしい。貞室の言語考察力も、この方面にはさして生彩を放たず、こじつけと見るべき考察も多い。ただし貞室は自説を固執せず、たとえば「きつぱり」の出自を「潔白」に求めながらも、「但別の事歟」と言を添えている。

3　発音・用語用法などの是非を論じたもの

副詞諸語の是非を論じたものでは、「非」の判断のものが圧倒的に多い。『かたこと』著述の意図からすれば当然のことであろう。ほめことばが見えるのは、59条と660条だけである。

59条では、ぬれそぼつ様の擬態語として「じぼ〳〵」「じつぼり」を斥けて、「しほ〳〵」「しよぼ〳〵」「しつぼり」を「よろし」と評している。これは「濁れること葉はいやしう聞え。すめるはやさしうおぼえ侍るなり(740)」という考えに基いている。また660条では、「ちんぼり」「ちよぼ〳〵」「ちぼ〳〵」を、「やさしう聞え侍る」と評し、「ちよこ〳〵」(小足に歩むさま)を「しほらしきこと葉」と評している。いずれもその語の音相をよしとしての批評であろう。

また「苦しかるまじき歟」という評も数ケ所に見えるが、これは消極的肯定であろう。この評を受けているのは、58条の「まつと(今卒度)」「もつと(そつと)」、59条の「しよぼくさ」、99条の「あちらこちら(あちこち)」、そして45条の「よけ(余慶)」である。「まつと」については「略語なれば。くるしかるまじき歟」と言う。また「しよぼくさ」の「草」はこと葉の縁だから差支えあるまいと言い、「あちらこちら」については、「らは付字なればくるしかるまじき歟」と言っている。ここには、さま〴〵に理由づけをして、新語を認めようとする心意が窺われる。238条の「まれか(稀なる)」には評語はないが、「か」を付字と説明しているので、「くるしかるまじき」と判断すべきであろう。45条で「よけ(余慶)」を「苦しからざる歟」とする判断の基準は明らかでない。

非とする判定は「あし41 721」「わろし114 203」「僻言77」「僻心得649」「いやしきこと葉706 728」「浅ましき俗語53」などの語をもって表明されている。また「……といふべきを……は如何」の類の評がしば〳〵現れるが、これも否定的批判の婉曲表現であることが多い。「いらざること117」「強強(とハこハ)しきなり33」も否定的評語である。

否定的評語を最も多く下しているのは発音面で、なかでも促音挿入の副詞と撥音挿入の副詞とが多くあがっている。「つまる」――すなわち促音挿入を好ましくないと指摘された副詞は次の諸語である。

26いつち　128いつつも　254かつつて(曽而)　25 274さづきに(先に)　53ぜつぴ(是非)　24たつた(唯)　10 28なつかなか・なかなつか　27ひつとつ　244むつさ・むつた(無左)　80とつくと(疾と)　92ひつしと(ひしと)　198ふつと　51ひつた物

このような促音挿入については、28条に「……但うへより云つづけ。又いきほひかゝりていふ時は。くるしからじといへども。いはぬにはしかじ。殊に物に書つくべきことにあらず」とも言う。語勢話勢の上で、ときに促音の挿入されることを許容しながらも、安易にそれになずむことをいましめている。また文章語としては許容しがたいと言う。穏当な意見である。

促音挿入とともに撥音挿入も「如何」「いらざること」「わろし」などと否定される。

117あんまり(あまり)　275いんぜん(以前)　260かんまいて・かんまへて(構而)　96ぎんぎだうだん(巍〻堂〻)　114しんぜん(自然)　24たんだ(唯)　112たんびこづと(度毎)(ママ)　123でけしんだい(出来次第)　90ふんだん(不断)　237やんがて(頓而)

副詞修飾は、本来強調強意に関わるところが大きい。それゆえ話ことばの副詞に促音や撥音が挿入されがちであるのは、自然の勢いでもある。が、ことばの純正を尚ぶ貞室が、自然の勢いに流される

ことをいましめるのもまた理のあることであろう。貞室はまた「濁るはあしかるべし（44）」と濁音化をも嫌った。

687じと〳〵　59じぼ〳〵・じつぼり（しほ〳〵・しつぼり）　661ずか〳〵・ずか・ずつか（すか〳〵）　44だくりぼくり・だくぼく（啄木の文字にや。然らば。たもしを清べきことなり）　101ぶし〳〵（ふし〴〵）　664ざつぱ（さつぱと）

促音撥音の挿入・濁音化以外にも、貞室が『かたこと』とするものは、次のようにさま〴〵ある。傍点は筆者の施したものである。

273せんどう（先度）　275いんぜ（以前）　167まんべ（満遍）　247なじよに（なぜに）　664しやつぱ（さつぱ）　665じつぱり・しいわり（しやつぱり）　151しゞう（種々）　127たいらく（大略）　237やかて（頓而）　123でけしんだい（出来次第）

これらは、そのきこえから言えば、長音化・短音化・拗音化・直音化・清音化などの多くのものを含んでいる。

一方、次のような語も、「如何」「いやしきことば」「僻言」などと評されている。

264あくふく（飽迄）　261をつとせで・をつとしかひで・をつともせひで（音もせひで）　706ぐつちやり　244ごつちや・ごちやくちや・むたくた・むたかは（無左と）　89さんぜじやうじゆ（常住）　670しくほく（しく〳〵）　77そくりばくり（そこばく）　659つんまり（つゞまやかなる）　656ぬんまり・ぬまり（ぬまめく）　679ぬんめり（滑かなる）　126　728どしやくしや　728とやくや　277よつぴとい（夜一よ）

これらはきこえのいやしい俗語・訛語として斥けられている副詞である。さきに促音挿入の語と指摘した「ぜつぴ（是非）」も、その評は「浅ましき俗語なるべし」である。促音挿入・撥音挿入・濁音化などと整理してきたものも、貞室の言語意識においては、すべて「僻言」「あさましき俗語」として統一されているのかもしれない。662条に「ずんぶ」・「ずぶ」をあづまこと葉かと言っているのも、おそらく否定的な意向を内に持っていると察せられる。

ところで貞室は114条に「をのづから」と言うべき時に「をのづと」と言うのは、「よきこと葉とはきこえ侍らず」と言っている。その理由は述べていないが、おそらくこれは新語拒否の心から出ているのであろう。両語の出典を求めてみると、「おのずと」は「おのずから」よりは新しい語のようである。貞室が「をのずと」を斥けるのは、今日、私などが「わりかし（割合に）」という副詞にいまだになじめないのと同類のものであろう。「119けくに・けくでか（結句）」「203さだめし（さだめて）」「118つゐど・つゐしか（終に）」「649根ををして（底を尽して）」「33とりわけ（とりわき）」を「などやらん聞あし」などと評するのも、新しい語を斥けて、括弧内の古い語をよしとしているのである。

俗語・新語の使用に対してこのように慎重であった貞室はまた、漢語にも慎重である。たとえば33条には「就中（なかんづく）別而（べつして）などいふ詞は強強（こはこは）しきなり。児少人などはいふべからず。別而といふを。とりわきと。やはらげていふが聞よう侍ると云り」とある。ここにあげられている「別而」は漢語副詞である。また「就中」は漢語ではないが、漢文訓読語に由来する副詞で、漢語副詞に準じる。副詞にかぎらず、たとえば挨拶ことばにおいても、みだりに漢語を使用し

ないようにとの忠告が19条・21条にある。このように言わざるを得ないほどに、一般人の日常語に漢語が多用されはじめた時代だったのであろう。

以上は発音や用語についての批判であるが、副詞の意味・用法について述べたものもわずかながらある。たとえば9条は「一流石（さすが）といふこと葉のつかひやう有べし」とあって、その用法の是非を論じている。すなわち貞室は「さすが」を単純なほめことばとして用いるのはあやまりで、今は見劣りのするものが、昔をしのばせる美を見せた時に「さすが……」とほめるべきだと説く。また多量を意味する「よけい」については、その本義は「余慶」であろうから、多量の意味にのみ用いるのは如何かと45条に言う。意味の推移や意味領域の広がりについては、いささか不寛容のようである。10条では「なか〳〵」の意味の広いことを認めているが、その根拠は、源氏物語桐壷の巻に、「なか〳〵」の用例がいくつも出ている――依るべき典拠がある――ということのようである。

『かたこと』における貞室の副詞語彙の解説と考察のあとをたどってみた。解説は簡明で、その論評も語源説のいくらかを除いては穏正である。

4　貞室のとりあげた副詞語彙

私はほぼ二百語の口頭語の副詞語彙が『かたこと』の中に収められていることを、貴重に思っている。意図して副詞語彙を集めたわけではないが、口頭語に注目する時、自然にこのように多くの副詞をとりあげることになった。日常語における用語の推移は、副詞語彙などにいち早く現れるのではあるまいか。貞室がとりあげて説き論じている副詞諸語は、彼がその文章の中に使用している副詞とは、別の層の語である。『かたこと』は、当時の口語副詞研究――特に擬音・擬態の副詞――の重要な一資料でもある。

貞室がその意味を説明した擬音・擬態の副詞はさきにあげたが、そのほかにも、次の諸語があがっている。（これらについても2・3の項でふれているが、まとめてここにあげる。）

ずか〳〵　しほ〳〵　じぼ〳〵　しよぼ〳〵　ちぼ〳〵　ちよぼ〳〵　ごちやくちや　どしやくしや　だくぼく　むたかは　むたくた

あんざり　けんざり　ちよつこり　きつぱり　しつぱり　じつぱり　ちつぱり　ちよつぱり　ちんぼり　ちんまり　そくりぼくり　だくりぼくり　ぬまり　ぬんまり　ぬんめり

がはと　かつぱと　くつと　ごつと　ずぶと　ずんと　つんと　すつかりと　ひしと　ひつしと

しよぼくさ　さつぱ　ざつぱ　しやつぱ　ずか　ずつか　ずんぶ　むつさ　むつた　ごつちや

これらを先のものに加え、擬音・擬態の副詞は一三〇語である。その語形式は、「り」語尾の語が五十八語で最も多く、ついで「しく〳〵」や「どしやくしや」のような畳語形式の語が四十一語ある。「と」語尾の語は十九語である。「に」語尾は「しとゝに」の一語であるが、これは文章語であろう。「しよぼくさ」と、「くさ」に終

る一語は、当時の俗語副詞として貴重である。そのほか「ざつぱ」「ずつか」のようなものが十語あるが、これらは「と」を添えなければ修飾にたち得ないであろう。が、それらを加えても「と」語尾の副詞は少ない。

『かたこと』のとりあげた擬音・擬態の副詞の音節数は、そのほとんどが四音節で、三音節語がいくらか見られる。なお五音節語は「すかすかと」「すつかりと」の二例、六音節語は「そくりばくり」「だくりぼくり」「ひらり〳〵」の三例である。

これらの諸語は、その造語法においても、注目すべきものを見せている。たとえば59条には「しよぼくさ」があがっている。「ぶつくさ」などは今日も用いる擬態副詞であるが、「〜くさ」語尾の副詞が文献に見えるものとしては、『かたこと』の「しよぼくさ」は早い例であろう。

また「あんざり（あざやか）36」「けんざり（けざやか）36」「かんごり（かごやか）740」の諸語は、もとの語と思える語の第一音節と第二音節の間に撥音を置き、第四音節を「り」でとめて副詞を形成している。このような副詞造語法は近世のものであろうか。

「そくりばくり（若干）77」や「だくりぼくり（だくぼく）44」の造語も語音形成も、この時期の新しいものではあるまいか。

『かたこと』のとりあげた擬音擬態副詞は、あの時代の日常語の実態と、そしてその底にある民間人の造語活力をしのばせる。それは貞室の意図した外のものであるが。

『かたこと』以前に擬音擬態副詞を多く集めたものに、異国の宣教師の手になる『日葡辞書』がある。その語数は『かたこと』のそれよりははるかに多い。こころみに『かたこと』のとりあげた擬音擬態副詞と、『日葡辞書』のそれと、そして現代語の擬音擬態副詞を集めた天沼寧氏編の『擬音語・擬態語辞典』の中の語とを比較してみた。結果は次のようであった。三書はそれ〴〵編著の意図も規模も異なるので、比較の結果はあくまで参考程度の資料にすぎない。

三書いずれにも見られる擬音擬態の副詞

語の右肩に×印のあるのは、同一語形ではあるが、語意の異なるもの、異なっているらしいものである。又、(日)は『日葡辞書』の略号、(天)は天沼寧氏の『擬音語擬態語辞典』の略号である。

がた〳〵　こと〳〵　しと〳〵×（(日)のみ別意）　しほ〳〵×（(日)と(天)とは同意）　ひら〳〵　にっこり　べつたり（(日)のみ別意）　しくしくと　ちよんと（九語）

『日葡辞書』にあがっている語は、「がた〳〵と」のように、すべて「と」語尾である。『かたこと』では「と」のつかない形であがっているが、ひとまずこの両者を同語――同系語――として扱っている。以下においても同様である。

『日葡辞書』にも『かたこと』にも見えている擬音擬態副詞

どしやくしや（(日)はどさくさ）　ちぼちぼ×　ひらり〳〵×　へつたり　がはと　かつぱと　くつと×　さつぱ×　すかと　すか〳〵と　ひしと　ひつしと　ふつと　むつた（十四語）

天沼寧氏編『擬音語・擬態語辞典』にも『かたこと』にも見えている擬音擬態の副詞

かた〳〵　ごと〳〵　じと〳〵　しよぼ〳〵×　ずか〳〵　ちよこ

〳〵　ちよば〳〵　どや〳〵　なよ〳〵　びら〳〵　べら〳〵
へら〳〵　めら〳〵　がつたり　きつぱり　しつぽり　ずつしり
ちんまり　どつしり　ぶらり　つんと（以上二十一語）

他の二書にも見えているのは、以上の四十四語である。『かたこと』には、これ以外に八十六語の擬音擬態副詞がとりあげられている。他の二書にも見えるものよりは、見えないもののほうがはるかに多いのは、擬音擬態の副詞に寿命の短い語が多いためであろうか。また『かたこと』のとりあげている擬音擬態の副詞に、かなり特異なものが多いのであろうか。

他の二書と共有する擬音擬態副詞の数は、『日葡辞書』によりも、天沼氏の『擬音語・擬態語辞典』に多い。『日葡辞書』の時代との隔りは五十年に足らず、現代との隔りは三百年を超えているのに、このような結果が見られるのは面白い。編著の意図も方法も異なる三書を単純に比較することは慎まねばならないが、『かたこと』は擬音擬態副詞の語史・語彙史研究にも、さらに活用されてよい書であろう。

著者貞室の意図したように、またその意図を越えて、『かたこと』は日本語について多くのことを語っている。『かたこと』を読むことをお奨めくださった白木先生に感謝申上げる。